

[シンポジウム：実践からの構築を目指して]

### 3. 実践の場における家族看護活動の定着を目指して —看護コンサルタント活動から—

家族看護研究所

渡辺裕子

はじめに

家族看護研究所の活動のうち、病床数約200、2つの訪問看護ステーションと2つの外来透析ユニットを関連機関にもつある医療機関での看護コンサルタント活動から、看護実践の場で家族看護を定着させるために、筆者が行っている活動の実際と、定着化に当たっての課題について述べたい。

#### 家族看護活動の定着を目指した活動の実際

当該医療機関での看護コンサルタント活動は、今年で3年目を迎えているが、活動を振り返ると、以下の二つの段階に分けられると考える。

1) 第1段階：変化に向けての素地をつくる段階  
家族看護実践の定着に向けて、現場の素地づくりに力を注いだ時期である。具体的には、まず最初に、ナースに家族看護実践のイメージをもってもらい、患者のみではなく家族を含めて看護を提供することの意義を実感してもらうために、筆者が直接家族看護実践を行い、家族看護のモデリングを実施した。ナースらに家族看護の実践能力を高めたいという動機づけが高まったところで家族看護の勉強会と事例検討会をそれぞれ月1回、1年間にわたり実施した。また、家族看護に関するナースの問題意識を大切に育てるために、家族看護に関する研究を支援した。これらの活動によって家族看護に対するナース間の意識が高まったため、2年目以降に勉強会を自主的な学習のグループに発展させた。

#### 2) 第2段階：変化を推進する段階

素地づくりの時期を経て、現在は、ナースらが家族看護活動の定着化のためのさまざまな変化を起こしていくプロセスを支援している。具体的には、家族看護の自主グループを核として、メンバーらの各病棟での家族看護の取り組みが円滑になされるよう、病棟婦長らに働きかけ、家族をも含めた看護計画の立案の方法をメンバーらと共に開発している。また、研究においては、ナースと共に家族看護研究に取り組んでおり、また、看護部だけではなく、他職種・他部門・他機関とも家族援助の視点を共有できるよう働きかけている。例えば、院内の多職種による緩和ケアの勉強会では、事例を通じて家族への援助のあり方をメンバーと共に討議し、そのファシリテーターとしての役割を担っている。また、医療関係者のみならずナースがボランティアの方々と協働し、一般住民向けの講演会の開催等の活動を支援している。

今後は、これらの活動が実を結び、第3段階の家族看護実践定着の段階を迎えるものと期待している。

#### 家族看護実践定着化に当たっての実践の場における課題

家族看護実践定着化のための課題としては、以下の点を考えている。

##### 1) 看護者側の課題

家族看護実践は、問題が生じてから対応するというのではなく、問題が生じないようにいかに家族のセルフケア機能を高めるかが重要であると考えている。そのためには、ナースの主体性を高め、問題指向

的な発想から目標指向的な発想への転換をすすめること、そして実際に家族との関係性を深めるスキルを獲得することが課題と考えている。また、治療や延命をめぐる家族内で意見が対立している等の倫理的な問題に対する対応能力の向上も重要な課題であろう。

### 2) 患者・家族側の課題

家族のセルフケア機能の発揮には、患者・家族の自己責任・自己選択が前提となる。そのためには健康な時からの介護のイメージ化が必要であり、一般の方々にそれが可能になるよう働きかけていくのも家族看護の重要な機能であろう。

### 3) システム上の課題

家族看護実践は、看護者のみの取り組みでは限界があり、家族全体を援助の対象と考える職場全体の

風土をつくり、家族看護専門看護師等を積極的に活用することが望まれる。また、実際の定着を考えると、必要なケースを選択し効率性を追求することや、経済的裏付けを確保することが大きな課題である。

### 教育・研究の課題

最後に教育・研究の課題を述べる。家族看護実践を現場に定着させるためには、まず事例の検討を緻密に行うことが必要であろう。そのなかでも、困難事例ばかりではなく、成功例に焦点を当て、成功の鍵を研究的に抽出することを提案したい。教育・研究者は、実践の場を育てるという意図をもって、現場に埋もれている宝を掘り起こし、実践的な知識構築に貢献することが求められていると考える。